

ごんぎつね

新美

南吉

一

これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの、中山という所に小さなお城があつて、中山様というお殿様が、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小さきつねで、しだのいっばいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺り

の村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入つていもをほり散らしたり、菜種がらの、干してあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしり取つていったり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨が上がると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていて、もずの音がキンキン、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出てきました。辺りの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川はいつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どつとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、はぎの株が、黄色くにごつた水に横だおしになって、もまれていきます。ご

んは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。

ごんは、見つからないように、そうっと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十へいじゅうだな。」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、腰こしの所まで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網あみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょように、円いはぎの葉が一まい、大きな黒子まぐろみたいにへばり付いていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網のいちばん後ろの、袋ふくろのようになったところを、水の中から持ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、くさった木切れなどが、ごちゃごちゃ入っていました。でもところどころ、白い物がきらきら光っています。それは、太ふというなぎの腹はらや、大きなきすの腹はらでした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみとい

つしよにぶちこみました。そしてまた、袋の口をしぼって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくを持って川から上がり、びくを土手に置いて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっている所より下手の川の中を目掛けて、ぼんぼん投げこみました。どの魚も、「トボン」と音を立てながら、にごった水の中へめぐりこみました。

いちばんしまいに、太ふというなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれったくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツといって、ごんの首へまき付きまし

た。そのとたんに兵十が、向こうから、

「うわア、ぬすとぎつねめ。」と、どなりたてました。

ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまき付いたままはなれません。ごんはそのまま横つ飛びに飛び出して一生けんめいに、にげていきました。

洞穴の近くの、はんの木の下でふり返ってみましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、穴の外の草の葉の上にのせておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓のうち
の裏を通りかかりますと、その、いちじくの木のか
げで、弥助の家内が、お齒黒を付けていました。かじ

屋の新兵衛のうちの裏を通ると、新兵衛の家内が、髪
をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。

「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の
音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立
つはずだが。」

こんなことを考えながらやってきますと、いつの間
にか、表に赤い井戸のある、兵十のうちの前へ来まし
た。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人
が集まっていました。よそ行きの着物を着て、腰に手
ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をた
いています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえ
ていました。

「ああ、葬式だ。」と、「ごんは思いました。

「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地
蔵さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠

く向こうにはお城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いています。と、村の方から、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちらちら見え始めました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみ折られていました。

ごんはのび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、位はいをささげています。いつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ。」

ごんはそう思いながら、頭を引っこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおっかあは、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりき

り網を持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのままおっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

三

兵十が、赤い井戸の所で、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっかあと二人きりで貧ますしい暮らしをしていたもので、おっかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。

「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」

こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思い

ました。

ごんは物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだァい。生きのいい、いわしだァい。」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていききました。と、弥助のおかみさんが裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を、道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。ごんはそのすき間に、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちの裏口から、うちの中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がまだ、井戸の所で麦をといでいるのが小さく見え

ました。ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗くりをどっさり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを

持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには兵十のほっぺたに、かすり傷きずが付いています。

どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとり言を言いました。

「いったいだれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと

思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた。」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷まで付けられたのか。

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へ回ってそ

の入口に、栗を置いて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、松たけも二、三本持っていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のお城の下を通過して少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片側かたがわにかくれて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助。」と、兵十が言いました。

「ああん。」

「おれあ、このごろ、とても、不思議なことがあるんだ。」

「何が？」

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗や松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが？」

「それが分からんのだよ。おれの知らんうちに、置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなア。」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなって立ち止まりました。加助は、ごんに

は気がつかないで、そのままさっさと歩きました。吉兵衛というお百姓のうちまで来ると、二人はそこへ入っていききました。ポンポンポンと木魚の音がしています。窓の障子に明かりが差していて、大きなぼうず頭がうつつて動いていました。ごんは、

「お念仏があるんだな。」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って吉兵衛のうちへ入っていききました。お経を読む声が聞こえてきました。

五

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいっしょに帰ってきます。ごんは、二人の話の間こうと思つて、ついていきました。兵十の影法師をふみふみ行きました。

お城の前まで来たとき、加助が言いました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ、神様が、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いましたが、おれが、栗や松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃあおれは、引き合わないなあ。

六

そのあくる日もごんは、栗を持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置で縄をなっていました。それでごんはうちの裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は、立ち上がって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゆうを取って、火薬をつめました。

そして足音をしのばせて近寄ちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、バタリ

とたおれました。兵十はかけよってきました。うちの中を見ると土間に栗が、固めて置いてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前まだったのか。いつも栗をくれたのは。」
ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火縄銃をバタリと、取り落としました。青8いけむりが、まだ筒口つつぐちから細く出ていました。

「ごんぎつね」

※『赤い鳥』版（鈴木三重吉主宰、1931年1月号）の「ごん狐」をもとに現代仮名遣いで表記しました。漢字については小学4年生までの学習漢字を基本とし、学習していない漢字には初出にルビをうちました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。
(TEL:0569-26-4888)